

オンライン講演会

「＜欧州のホスピス＞～訪問ホスピスの
担い手は市民ボランティア～」

浅川澄一（福祉ジャーナリスト）

7月18日（土）午後2時～3時半

定員 500人（会員・非会員を問わず無料）

形式：オンライン（ZOOM）

主催 日本尊厳死協会北海道支部

申し込み： 北海道支部ホームページ（前日まで）

<https://songenshi-kyokai.or.jp/hokkaido/>

講演要旨

日本の介護レベルは介護保険施行後に急速に高まった。集団管理型から個別ケアへと転換、認知症ケアでは北欧にほぼ追いついた。「本人本位」の考え方の浸透による。だが、人生の終末期、「死」に際は、「生」に拘る医療者と家族の権限が強い。本人の思い、自己決定が成就しない。

では欧州ではどうか。私が訪ねた緩和ケアやホスピスの現場を振り返ってみる。日本より5年前に介護保険を導入したドイツのホスピスは日常生活の延長そのものだった。QOL（生活の質）の尊重がQOD（死の質）でも続く。

入所型や緩和ケア病棟のほかに、QODを体現した日本では数少ない「訪問ホスピス」が普及している。しかもその担い手は市民ボランティア。医療・介護サービスの枠を超えた普通の生活として定着していればこそだ。